

吉本隆明全著作集

8

吉本隆明全著作集

8

作家論
Ⅱ

勁草書房

吉本隆明全著作集 8

昭和四八年 二月一五日第一刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房

〔東京都文京区後楽二の二三の一五
電話番号八一四局六八六一 郵便番
号一二二 振替口座東京一七五二五
三番〕

印刷所 精興社

製本所 青木製本

* 定価は外函に表示してあります。

© 1973 by Takaki Yoshimoto

目

次

第Ⅰ部

高村光太郎

『道程』前期……………八

『道程』論……………一五

『智恵子抄』論……………二五

詩の註解……………三五

戦争期……………一三

敗戦期……………一七

戦後期……………一四

第Ⅱ部

Ⅰ 小論集

「出さず」にしまつた手紙の一束」のこと……………一〇

詩のなかの女……………一三

高村光太郎鑑賞……………一五

高村光太郎の世界……………二五

高村光太郎私誌……………二七

II 春秋社版『高村光太郎選集』解題

一 端緒の問題……………二六

二 〈自然〉の位置……………二五

三 成熟について……………二七

四 崩壊の様式について……………二九

五 二代の回顧について……………三〇

六 高村光太郎と水野葉舟——その相互代位の関係……………三六

七 彫刻のわからなさ	三五
------------	----

第Ⅲ部

I 講演

詩人としての高村光太郎と夏目漱石	三五〇
------------------	-----

高村光太郎について——鷗外をめぐる人々——	三八一
-----------------------	-----

II 年譜・参考文献目録 他

年譜	四〇六
----	-----

参考文献目録	四二八
--------	-----

飯塚書店版あとがき	四三一
-----------	-----

春秋社版あとがき	四三三
----------	-----

究極の願望	四三六
-------	-----

解題	四三七
----	-----

作家論 Ⅱ

吉本隆明全著作集

8

高村光太郎

第 I 部

高村光太郎

『道程』前期

高村光太郎には、明治四十三年（一九一〇）以前に、詩集『道程』にいなかった数篇の詩がある。

「秒刻」、「マデル」、「豆腐屋」、「博士」、「あらしひ」、「敗闕録」などである。それ以前にさかのぼると、二百七十首ほどの短歌作品がある。時代的にいえば、短歌作品はおおむね欧米留学までの作品であり、『道程』未収録の詩は、がいて渡米中の試作品である。『道程』未収録の詩は未熟なために高村が『道程』に加えなかったのだろうが、短歌作品から詩へうつってゆく過渡的な模索が、どう行われたかをしめしている。しかしそれよりも重要なことは、欧米に留学しなかったならば、歌人高村碎雨（篁碎雨）が詩人高村光太郎に転換することはなかったことを、この未収録の詩が暗示していることである。高村は、後に留学中ボードレーやヴェルレーヌの詩に接してみても、はじめて詩とはかくのごとき自由な表現ができるものか、と納得したといっているように、欧米の近代詩にふれて、短歌からの開眼の機をつかんだのだが、同時に、詩によって「安全弁」的にはき出さねばならなかった、生涯の内面的なモチーフを、欧米留学によってはじめて背負わされたということができる。『道程』未収録の詩は、作品としては、過程的な模索にすぎないため、いうべきことを、無形の形式的な制約にしばられて、よくいいないでいるもどかしい作品だが、内面的なモチー

フからみれば、『道程』の初期作品とまったく地つづきであるということができ、そのために『道程』前期にふくめて、独立してあつかわねばならない問題をふくんでいる。この『道程』前期は、欧米留学が、高村光太郎の生涯にあたえた意味を暗示する時期にあたっている。

高村光太郎が、欧米留学からかえたのは、明治四十二年六月である。あたかも、幸徳事件の突発する一年前であり、近代日本は、はじめて労役大衆の反抗運動を体験しつつあるさなかであった。高村光太郎は、生涯にわたって、いわゆる社会運動に投じることのなかった詩人であるが、また、同時に生涯、大衆にたいするシムパッシーを捨てなかった詩人であった。幸徳事件前後の物情は、高村にどんな社会的見解をも構成させていないのであるが、それにもかかわらず、何故、幸徳事件によって何の影響もつけなかったのかを説明せざるをえないものを、高村光太郎の生涯は背負っている。

高村が社会運動に投じなかったのは、ひとつの撰択であり、大衆にたいするシムパッシーを失わなかったこともひとつの撰択であった。この生涯の撰択を、まず幸徳事件によってテストしなければならなかったのが新婦朝の高村光太郎であった。わたしは、『道程』以前の詩作品をかんがえたうえで、欧米留学がえりの高村光太郎を、幸徳事件前後の情勢につきあててみなければならぬとおもう。明治四十三年五月二十五日、宮下太吉たち四人の社会主義者が、検挙されたのをきっかけにして、いわゆる大逆事件はおこっている。すでに、明治四十年二月には、足尾銅山に暴動がおこり、幌内炭鉱、別子銅山にまで波及している。また、一方では、日本社会党の結社禁止事件、赤旗事件などが相ついでおこり、幸徳秋水たち、革命的サンディカリストが次第に急進化してゆく動向と、「彼の危険なる社会主義者を拘束せん」と機会をうかがっている政府の弾圧政策とが対峙していた。日本社会党が、結社禁止をうけたのは、おもに、幸徳が、第二回大会でやった議会主義を排

して労働者の直接行動によって、社会主義を実現しなければならない、という演説のためだとされておられ、このときから、幸徳たち社会主義者中の急進派は、官辺から抹殺されるべくつけねらわれていたということが出来る。幸徳事件にまでゆきついた「三四年前から荒々しくやつてゐた革命騒ぎ」(御風)は、日露戦争後、日本の社会が急速に膨脹しなければならなかったところに、すでに胚胎していた。

このとき、日本の資本制生産は、明治三十年代末期から四十年代を中心に、軽工業から重工業の優位に移りつつあり、製鋼工業は発達して、独占的なカルテル、コンツエルンが、はじめて結ばれるとともに、桂内閣の保護下に、はじめての金融シンジケートが設立されつつあったのである。この独占的な段階へうつてゆく社会的な過程で、日露役の戦債を背負ったままの戦後の大衆はよろめかざるをえず、そのうえ、四十年代にはいつてから、恐慌と物価高がつづいたため、もともと苦境にさらされた労役大衆と、もともとこの社会的な動向をするどく洞察した革命的サンディカリストの一群とは、反抗にたたざるをえなかったのである。幸徳事件にいたるまでの一連の事件は、日本の資本制を専制的な保護によって飛躍させようとした政府が、この反抗を、しやにむに封殺する必要にせまられたとき、当然、突発せざるをえなかったということができよう。

文学的に、この社会的な動向を、いちばん鋭敏に受感し、苦悶をよぎなくされ、そのうえ、幸徳事件をさかいにして決定的な方向変換をせまられたのは、自然主義文学運動であった。自然主義文学運動が幸徳事件からうけた打撃は、おそらく個々の文学者たちがうけた衝激の問題をはるかにこえていた。明治四十四年十二月の『早稲田文学』がこころみた「今年の文芸界に於て最も印象の深かつた事」というアンケートのなかで、戸川秋骨は、自然主義がおとろえ、それにかわつて耽美的な傾向が興隆する徴候を指摘しながら、そのよつてきたる原因を、「つまり前内閣が政府として持